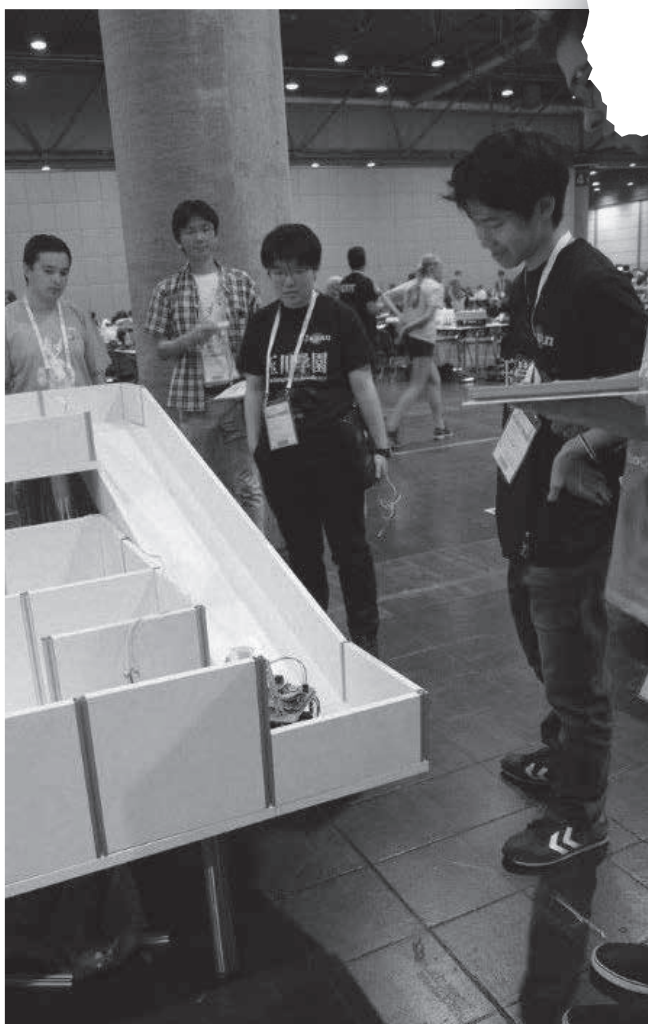




ロボカップ 世界大会で 大健闘！ 矢澤

RoboCup
LEIPZIG
GERMANY 2016
30 JUNE to 4 JULY

○ CRoboCup2016 開催委員会



手作りの自律移動型ロボットで被災者救出作戦を遂行する世界大会、「ロボカップ 2016 ライプチヒ大会」ジュニア部門で世界初挑戦した中央大学理工学部2年・矢澤めぐみさんのチームは12位(出場23チーム)だった。メダルは遠かったが、国際舞台でしっかりとつかんだものがある。

開 催国ドイツ(ライプチヒ市)へ向かう航空機内。機体が気流などで揺れると、矢澤さんは気が気ではなかった。

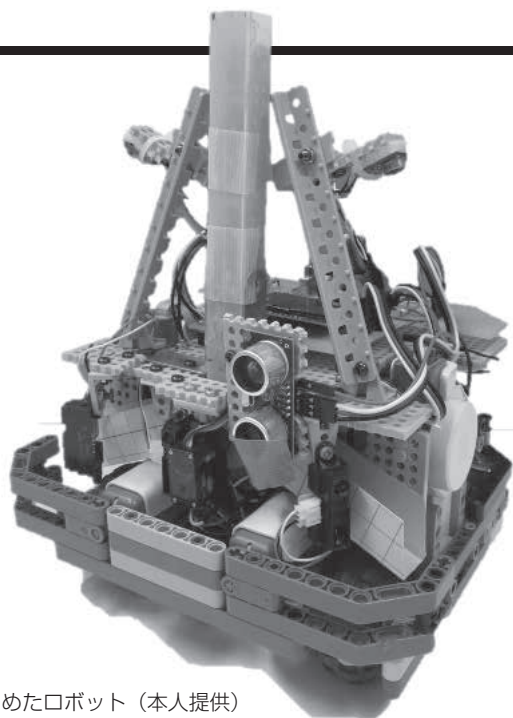
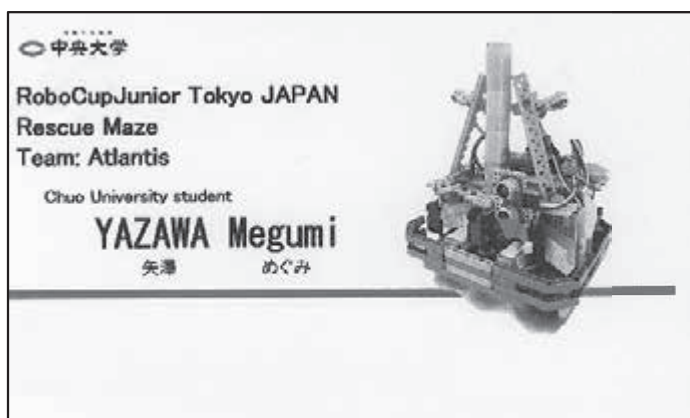
座席からやや上を向いて、収納ボックス内のロボット2機(予備機を含む)を見やる。「大丈夫かな…」。また、揺れた。揺れるたびに心も揺れる。「もう揺れないで」

機内に持込むため精密機械のロボットを分解して、大事に、大事にスーツケースに収めた。搭乗前の空港内保安検査場。金属探知機を

(写真上)
戦い終えて、左から引率教員の田原剛二郎先生、國吉さん、矢澤さん(写真はいずれも矢澤さん提供)

(写真下)
競技中、ロボット(手前)を見つめる矢澤さん(中央)と國吉さん(右)

大会用に作った名刺



心をこめたロボット (本人提供)

めぐみさん (理工学部2年)

くぐる。警報ブザーが鳴る。係員の求めに応じ、ケースを開けてロボットを見せる。

バラバラでは何だか分からないから完成形の写真を持参した。係員はその画像を見てようやく納得。苦労した末、機内に場所を確保した。

入国時も組み立て後の写真を見せて了解を得た。東京・羽田発ミュンヘン経由ライピチヒ行き。ハラハラドキドキの連続だった。

6月28日。会場のライブチヒメッセ(新見本会場・国際会議場)に入った。大会パートナーのくによしたける國吉健路さん=東京・玉川学園中学3年=と共にロボットを組み立てた。

近くでは外国人チームが同じような作業をしている。ちらりと見ただけでも完成度の高さが分かった。3Dプリンターなどを使って、一から作りあげ、上手に使いこなしている。矢澤さんらの作品は既製部品が機体の8割にも及ぶ。



祈る思いで競技中のロボットを見守る

「彼らのロボットは一つの研究室を見るようでした。私たちの『できている』は、世界的にはできていないと知りました。この時点で世界一は無理かもしれないと感じました」

次に試運転を見たら「表彰台もどうかなあ…」とジュニアの日本チャンピオンがこれまでにない不安を感じた。

競技が始まった。出場種目は「ロボカップレスキュー」だ(別掲、次ページ)。技術大国・日本代表の心意気を見せる時がやってきた。

愛機は高さ約22センチ、幅約18センチ、タイヤ幅5・3センチ。競技規定の8分間、迷路のようなコースを進み、

コーナーで曲がる。

救助が必要と察知したら案内板を落として知らせる。一連の操作の間、愛機は思惑通りに動いた。しかし、外国勢はそれ以上の働きを披露した。

「コーナーで90度に曲がる。スピードは速く、突破性が高い。私たちはレースが終わったとき(順位で)一桁には入りたいと思っていましたが…」

結果は23チーム中12位。優勝チームの獲得ポイントは3215、矢澤チームは1410。6位までが2000ポイント以上獲得していた。

「世界との差を感じました。年下であっても素質、キャリア、環境が違いました。もっと勉強しないと

ダメです。既製部品では限界があります。私たちにはもっともっとやる必要があります」

大会は7月4日、全日程を終えた。フリーになった最終日午後から、気分を変えて市内観光へ。おいしいモノも食べたい。大会中のランチによく食べた名物のフランクフルトソーセージを挟んだホットドッグも良かったけれど…。

市内レストランでは自ら注文した。中大でドイツ語を履修中。出発前に復習していた。「文章は辞書をひいたら、だいたい分かります」ところが、メニューを見て、これは何？ ジュースの種類表示に



市内観光、お気に入りの1枚

見知らぬ単語があった。辞書にはパイナップルとあった。リンゴやミカンのドイツ語は知っていたが、また一つ勉強になった。

競技仲間や同行した家族で取り分けようと、大振りの骨付き肉を頼んだ。自らはビーフサラダにした。ほかにアレコレ頼もうとする

と母親からストップがかかった。

ド イツ旅行の経験があり、「ドイツではね、1つの品にパンとスープが付

いてくるの。そんなに頼んだら…。パンとスープでテーブルが埋まってしまう。首をすくめながらも「私はドイツの黒パンや堅いパンが好き」と笑顔を見せた。

現地の料理を楽しんだ後は、歴史を感じさせる荘厳な教会建物に目を見張り、教会内のステンドグラス前で深い美しさに見とれた。別世界に誘われるような気分だった。

鉄道のライプチヒ中央駅では映画「ハリーポッター」で見た景色を駅構内で見えた。プラットホームの見たこともない長さ

と24番線もある数の多さに驚き、それなのにトイレがたった1つで、しかも有料というのにビックリした。

街にゆかりのある偉大なる音楽家、バッハ博物館も訪れ、館内ショップでオルゴールを買った。流れる曲は「ミュゼット」。「穏やかな気持ちになれます」と矢澤さん。世界的に知られるバッハでも苦しみに耐えた時代があったことを知った。

ジュニア部門は世界大会を最後に卒業した。初出場したロボカップ大会を「苦は楽の種」と受け止め、今後を考えている。

ロボットは実に多種多様で、これからの目標設定や製作環境に思い悩む。所属先にしてもこれまで母校・玉川学園としてきたが、今度は中大で取り組みたい。悩みの種



□ ロボカップレスキュー

自分で考えて動く自律移動型ロボットの技術を災害救助に利用しようというプロジェクト。地震などの大規模災害時を想定して救助戦略を発展させようというシュミレーションと、災害現場で救助に役立つ自律型ロボットの開発を推進する活動(出展・ロボカップ日本委員会などより)。

□ ライプチヒ市

開催地はドイツ東部の都市ライプチヒ。この街を「ゆかりの地」とするのは音楽家のバッハ、メンデルスゾーン。文豪ゲーテ、哲学者ニーチェら。名だたる人物の名前が街の歴史に刻まれている。



現地で購入したオルゴール

は尽きない。

その中で再認識したことがある。「私たちが大会中に不調でも、母はいつものように見守ってくれました。うれしかったです」と照れながら話した。

ロボットには人間の願いが込められる。矢澤さんがいずれ完成させる新型ロボットには、母譲りの優しさが、たっぷり注ぎ込まれることだろう。